

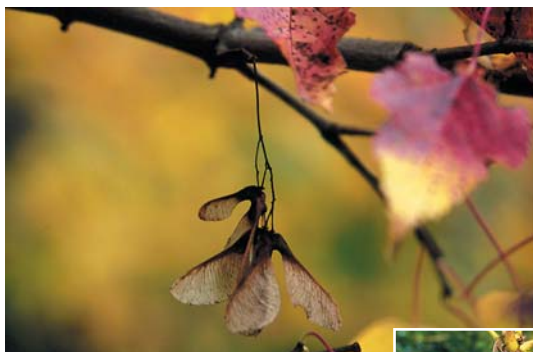
実や種

を見る



キハダ

羽のついた種 — 少しでも広がるために



カラコギカエデの種（9～10月）

左の写真はカラコギカエデの種です。1つをちぎり取って投げるとクルクルと回りながら落ちていきます。種の本体は根元の^{あつ}厚くなったところに入っていて、残りは羽の^{やくわり}役割をしています。

この羽は、風に乗って少しでも遠くへ種を広げるためのものです。

木は動くことができないので、種で生える場所を広げます。そのために、いろいろな工夫がされています。



ヤチダモの種（9～10月）



ハルニレの種。円内は熟したもの（6月）

ヤチダモの種の羽はじょうぶで、発芽まで2年かかります。種を取って植えても翌年には芽が出ません。

果実をつける — 食べてもらって広がる

果実をつける木は鳥や動物に食べてもらい、種がはき出されたり、フンといっしょに出されることで広がります。

ツルウメドキなど冬にも実が残るものは、ヒヨドリなどにとって大切な食べ物となります。



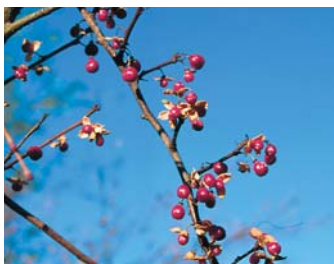
エジニワトコの実（8～9月）



エゾノウミズザクラの実（7～8月）



ケヤマウゴギの実（9～10月）



ツルウメの実（10月～冬）



ヤマグワの実。おいしい（7月）

 クルミやドングリ — 動物に埋めてもらう



オニグルミの実（9～10月）中に固い種（下の円）があり、リスやネズミはそれを割って中身を食べる。人が食べてもおいしい

エゾリスはオニグルミやドングリ（カシワやミズナラ）の実を冬に^{そな}えて土に^うめておきます。その中で食べられなかったものが春になって芽を出し、新しい木となって育ちます。

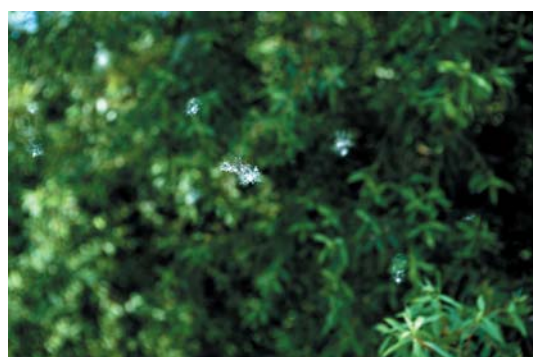


カシワ（9月）先が分かれて、「帽子」がささくれる



ミズナラ（9～10月）先が
とがっている

✂ 綿のついた種 — どこまでも飛んでいく？



綿毛を付けて風に舞うケシヨウヤナギの種（6月）

ヤナギは綿毛のついた小さな種を風に乗せて広げます。育つ場所を短期間で広げることができるので、別名「速足の旅人（クイックトラベラー）」と呼ばれます。



開いたケシヨウヤナギの実



開いたドロヤナギの実

✂ そのほかこんな実や種も



ピンク色が鮮やかなマユミの実（10月）
くす玉のような実は丸っこい三角形（逆
ハート形）で、4つのカドのあるふくら
みに分かれる

マユミやツリバナの仲間の実はくす玉のように枝からぶら下がります。シラカンバ（シラカバ）やハンノキ、ケヤマハンノキなどは、房やかさの中に小さな種をたくさん詰めこんでいます。

他にもイヌエンジュやハシドイは種（マメ）の入ったさやをつ
け、キタコブシは袋ふくろのような実をつけます。



ツリバナの実（9～10月）
ボールのように丸い



シラカンバ(シラカバ)の穂(9~10月)
1つの穂の中に約550粒の種がある

参考文献

「北海道 樹木図鑑」佐藤孝夫 亜璃西社 1990

「新版 北海道の樹」辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫 北海道大学図書刊
行会 1992

「治水の杜 ガイドブック」北海道開発局常広開発建設部 2002

「ヤナギ類 その見分け方と使い方」 斎藤新一郎 (社)北海道治山協会 2001

「木と動物の森づくり－樹木の種子散布作戦」 斎藤新一郎 八坂書房
2000